

子どもが生きる主体的・協働的な学びのある授業の創造

大分県中津市立鶴居小学校

全校児童数	491名(男子245名 女子246名)		
全クラス数	18	教職員数	42名
体育専科教員訪問学校数			4校
訪問校	中津市立沖代小・如水小・和田小・豊田小		
体育専科教員名		伊藤 滋	

Plan：取組時の課題と計画

1 取組時の課題

- ◆カリキュラムの系統性が確立されていない。
- ◆有効な教材の数が足りない。跳び箱・マット・ボール
- ◆感染症対策での授業がイメージできない。
- ◆若年教師が多く、経験が少ない。
- ◆体育館が狭く、合同体育で球技ができにくい。
- ◆児童の体力の二極化

2 取組の計画

- ① 年間カリキュラムの作成・見直し（コロナ対応）
気候・学校特性を考えた種目ごとの系統的なカリキュラム作成を行う2月～4月
- ② 教職員への研修
4月・6月・8月に校内研修を行い、教職員への意思統一を図る。
8月には、コロナ対応の校内教職員向け研修を行う
- ③ 特別期間を設ける
陸上週間（ハードル走）・マット週間・跳び箱週間
ボールゲーム週間・なわとび週間・マラソン週間をもうけ集中して運動を行う

Do：実践内容

1 カリキュラム作成

- ① 学年ごと種別ごとに系統性を持った年間カリキュラムの作成を行う。（4月までに）
校内体育部6名と体育専科教諭にて

2 教職員への研修

- ① 4月・6月・8月に教職員全体で体育についての研修を行う。

【研修内容】

- ・体育学習の特性と教師の関わり方
- ・体力測定の様子と正確な測定方法について
- ・表現・水泳の指導方法と留意点について

3 特別期間の取り組み

- ① マット・跳び箱週間11月 ボールゲーム週間11月～12月 なわとび週間1月 持久走週間1月を設定し、全校で同じ種別に取り組む

4 その他の取り組み

- ① マットカードや跳び箱カードやハイジャンプカードなどの個人カルテを作成し児童の記録を次の年度に残す。
- ② ボールやハードルの数を増やし、一人1個のボール、3人で1台のハードル使用が可能にする。
- ③ 振り返りの時間を活用しチームワークやルールについて確認するとともに、新しい発見や友達を認めるなどチームプレーについて学ぶ。

●工夫したこと（&苦労した点）

- ① カルテを次年度に残すことにより、個人の成長が明確になる。
- ② ウォーミングアップをパターン化し、音楽に乗せてストレッチ体操やボールハンドリングを行うことにより、楽しく体を動かすことができた。
- ③ 各種目別に系統性を確立することにより、次年度への導入がスムーズになり、児童の意欲も向上する。
- ④ 学習リーダーをつくる。（ウォーミングアップを任せ、グループのキャプテンになる）
- ⑤ 初任者や若年教師への指導（年10回以上授業研究を行う）

Check：取組の成果

- ① アンケートで体育がすきと答える児童の割合が増えた。また、保護者アンケートにおいても、体育の授業が楽しいという回答の割合が増えた。
- ② 体育の授業規律が整ってきたことで、校内在落着いてきた。（廊下の歩き方や全校集会の時の様子）

Action：今後の課題

- ① 感染症の影響でカリキュラムの変更を行わなければならなかったこと。
- ② 他校への訪問計画の調整が難しかった。
他校の教育課程に変更があった場合に対応しづらかった。

◎体力向上の取組がもたらす波及効果

集団行動が、教師と子どもに共通認識され、児童に身についたことにより、児童朝会や運動会や避難訓練などの集合の態度が格段に良くなってきた。大人数で集まったときの心構えを理解し、静かに話を聞ける態度が備わってきた。



11月の跳び箱週間、体育館に跳び箱を11台準備する（跳び箱を横にしての開脚跳び）



11月マット週間、三密を避けたマット運動の授業 肩支持倒立



11月マット週間、ソーシャルディスタンスのマット運動 T字バランス



11月跳び箱週間の板書 めあてとまとめ
ドン・パン・トンで強さのイメージ化